「**神の小羊**」（ヨハネによる福音書一章二九～三四節）

1　洗礼者ヨハネ

今日は、アドベント（待降節）二番目の日曜日です。聖書は先週の続きです。今年のアドベント、私ども、聖書の伝える洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）を取り上げています。

洗礼者ヨハネというのは、イエス・キリストに先立って、〈神の国は近づいたというメッセージ〉と、〈洗礼活動〉をもって、当時のユダヤ社会にセンセーションを巻き起こした人物です。

洗礼者ヨハネのメッセージ、神の国は近づいたというのは（マタイ三・二）、言葉の上では、イエスのメッセージと同じです（マルコ一・一五）。ただイエスの場合、それが、福音、喜びの響きを持っていたのに対して、洗礼者ヨハネの場合は、そのメッセージは、むしろ悔い改めへの呼びかけであったのです。ヨハネが強調したのは神の裁きと怒りが近づいているということでした。

そしてその悔い改めのしるしとして授けられたのが洗礼でした。ヨルダン川で水をもって洗礼はなされていました。

洗礼活動というだけなら、ヨハネがはじめて始めたというのではありません。ユダヤ教には、沐浴（もくよく）というのがあって、それは、水で洗う、汚れを落とす、清めるという、宗教的な一つの儀礼（＝みそぎ）としてなされていました。ただこれは日に何回も行うものです。

これに対して、生涯一回しか行わない洗礼も、当時のユダヤ教にはあり、ユダヤ教への改宗者に対して行われていたものです。洗礼者ヨハネの洗礼はこちらに近いのでしょうけれど、厳しく悔い改めを迫る、生き方の変化を迫る彼のメッセージは、ヨハネの洗礼を、入会儀礼とはまったく違うものにしていました。ユダヤの人々もそのように受けとったのです。

一回だけという点では、ユダヤ教、洗礼者ヨハネ、そしてキリスト教の洗礼、それぞれ意味づけは異なりますが、同じです。どの場合も、洗礼は決定的なことと受けとめられていたのです。

ところで、先週、「洗礼者ヨハネの証し」と題して、一つ前の聖書箇所によって話をしましたが、分かりにくいところもあったようです。もう一度別の観点から説明して今日の箇所につなげられればと思います。

先週の箇所で洗礼者ヨハネは、あなたは「メシア」か、それとも「エリヤ」か、それとも「あの預言者か」と問われ、ヨハネが「違う」と言って、ことごとく否定したことを読みました。

〈別の観点から〉というのは、なぜそんなことを聞いたのかという、エルサレムから来た人たちの質問の背景を考えてみるということです。

これは、当時のユダヤの人々の持っていた、旧約聖書から引き継いだ歴史観と関係

があります。

彼らの考えの根本には、この悪と苦しみに満ちた今の世に神は終止符を打ち、新しい世界をわれわれにもたらしてくださるというのがありました。神の国とも、天の国とも言われるものが来るということです。それが彼らの期待であり、生きる希望であったのです。

そこまではいいのですが、しかしそれをだれが実現してくれるのか、あるいはその先触れとなる人物はだれかとなると、いろいろあって、はっきりした共通の認識はなかったようです。そこにエルサレムから来たユダヤ人たちが何人かの名前を出して尋ねた理由があったのです。

今日は、そこで上がったメシア（メシアは名前ではなく称号）のことも、エリヤのことも（マラキ三・二五）、「あの預言者」のことも（申命記一八・一五）くり返しませんが、質問者たちは、こうした称号ないし名前を上げて、期待される・予想される人物像に合わせて、洗礼者ヨハネも理解しようとしたのです。自分たちの理解の範囲の中に収めようとしたと言ってもよいかも知れません。しかしヨハネは、それらをみな否定することによって、人々の理解に収まるものでないことを明らかにしたのです。それが先週の聖書箇所、一九節から二八節までの要点です。

2　証人として

洗礼者ヨハネが、ユダヤの人々の期待している人物に当てはまらないとすれば、彼はいったい何者なのでしょうか。

聖書は、これを、証しをする人、証人（しょうにん）という言葉でとらえ、私どもに紹介しています。

この福音書のいわば序章（一・一～一八）に当たるところで、洗礼者ヨハネについてこう言われています。

> 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするために来た。また、すべての人が彼によって信じるようになるためである（一・六～七）。

神に遣わされ、証しのために来た人、これが洗礼者ヨハネについての聖書の見方にほかなりません。

この証し、証言、あるいは証人という言葉が、聖書において重要な言葉であることは私どもが想像する以上のものがあります。

証し（証言）とか証人というのは、本来は法律用語です。人の前で、ある事柄について、それを真実であると確言するということ、その意味で旧約聖書でよく使われます。十戒の第九戒の、偽証してはならない（出エジプト二〇・一六）という掟も、これに関わります。

新約聖書では、何より、私ども、よく知っておくべきことは、イエス・キリストご

自身が、十字架の御業をもって神の真実を証しした「忠実な、まことの証人」（ヨハネ黙示録三・一四〔口語訳〕、一・五、テモテ一、六・一三他）と呼ばれていることです。

その上で、イエスを信じ、これに従う私どもキリスト者も、証人であることが許されています。それは、ペトロら、初代教会の使徒たちだけではありません。じつにすべての信徒が、キリストの証人として立てられているのです。教会は、証人の群れにほかなりません。

ここまで申し上げれば、聖霊の証しにも触れないわけにはいきません。私どもは自分の力で、イエス・キリストを救い主として告白し、証しし、証人としての務めを全うすることはできません。私どもの証しを、聖霊の働きが支えるのです。人の言葉を神の言葉として、説教の言葉を神の言葉として伝達するのは、聖霊の証しによるのです。

洗礼者ヨハネは神から遣わされて、イエス・キリストの証人とされました。彼は自らを低くし、徹底して低くして、ただイエス・キリストを指し示す、十字架を指し示す「指」（グリューネヴァルト）、また荒れ野の「声」となったのです。

3　わたしの後から来る方

それなら、洗礼者ヨハネは、「わたしの後から来られる方」をどのような方として証ししたのでしょうか。

それを考える前に、今日の箇所の背景に、はっきり書いてありませんけれど、イエスの洗礼、つまり、ヨハネから洗礼を受けたこと、があるように思いますので、それについてまず申し上げておきたいと思います。

ガリラヤのナザレで三〇歳までを過ごしていたイエスにも、洗礼者ヨハネの評判は聞こえていました。あるとき、イエスは、郷里を離れ、ヨルダン側の洗礼者ヨハネのところにやってきます。今日の箇所の最初のところ、「ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て」（二九節）はそのことを言っているのではないでしょうか。そしてヨハネから洗礼を受け、郷里に戻り、宣教を開始します。

洗礼者ヨハネは、イエスと、母親同士は姻戚関係があったものの（ルカ一章）、面識はなかったようです。しかし、今日の箇所から見ると、洗礼者ヨハネは、イエスが特別の人だということを、すぐに見抜いたようです。

> その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられてからである』とわたしが言ったのはこの方のことである」（二九～三〇節）。

そして洗礼を授けてからも、ヨハネは、イエスが特別の方であることを、次のようにして知ったとあります。

ヨハネは証しした。「わたしは、霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、「霊が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である」とわたしに言われた。わたしはそれを見た（三二～三四節）。

洗礼を授けてからも分かったのです。洗礼のあと、イエスに聖霊が降りそこに留まっていた。彼は「それを見た」。それは、彼を遣わした方、すなわち、神が、彼に言っていたことと一致したというのです。

それゆえ洗礼者ヨハネは、証しします。イエス・キリストを証しします。証しとは他の人間に向かって発せられる人間の言葉です。それは、すべての人が、その証人の言葉によって信じるための言葉です。証人の栄誉のためではありません。くり返し申します。洗礼者ヨハネにとって、イエス・キリストが栄え、自らは衰えるのです。それが証人です。

福音書を書いたヨハネは、この福音書の始まりの段階で、イエス・キリストについて大切なことを、洗礼者ヨハネに語らせています。

第一に重要なのは、「世の罪を取り除く神の小羊」（二九節）という言葉です。神の小羊、この言葉で、私ども、旧約聖書から、二つのことを思い起こします。一つは出エジプトの故事です。昔々、エジプトで苦しんでいたイスラエルの民が、モーセに率いられてエジプトを脱出します。脱出のその日の晩、神の命令にしたがって、ユダヤの民は家々の鴨居に、屠られた小羊の血を塗ります。神は、それを目印に、その家々は「過ぎ越して」、禍を与えませんでした。屠られた小羊の血は、イスラエルの民を救ったのです。

もう一つは、イザヤ書五三章です。預言者は、苦難を受けて、なおも黙って耐えて死に向かう人を「屠（ほふ）り場に引かれる小羊のように」（五三・七）と言っています。

この神の小羊が、イエス・キリストの十字架の死を意味するものと、新約聖書で受けとめられたことは、言うまでもありません。神の小羊、それは、神が、その苦難と死によって、人々に救いを与える、神の払う犠牲です。それは、どこまでも人を愛する神の愛のしるしです。

第二に、洗礼者ヨハネが描くイエス・キリストは、世のはじめからおられる神の子です。今日はこれに触れず、三つ目のことを申し上げます。それは、イエス・キリストは、自ら聖霊を受けて、聖霊によって私どもに洗礼を授けてくださる方です。イエス・キリストの名によって洗礼を受けるとき、私どもは、神から聖霊を受けて、それによって新しい命に生かされるのです。神の子とされ、神に属する者として生きることが許されます。私どもの洗礼の水は手段です。しるしです。実質は、与えられる聖霊の賜物を示しているのです。洗礼者ヨハネは、新しい命の霊をもたらすイエス・キリストを指し示す証人なのです。

（一二月四日）